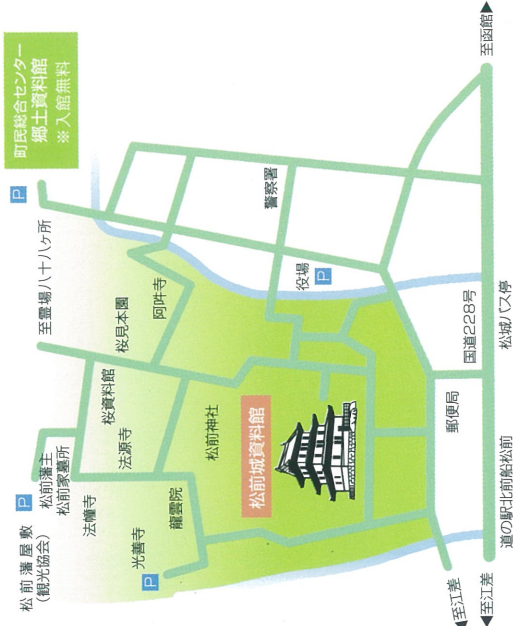




**松前城資料館**
〒049-1511 松前郡松前町字松城144番地
TEL・FAX (0139) 42-2216



バス ● 函館バス【松城】下車 徒歩10分

自宅用車 ● JR木古内駅から約80分

アクセス

- 大人→高校生以上 ● 小人→小・中学生以上
- 幼児→無料

入館料金	松前城資料館		個人	大人	360円
			小人	240円	
	松前城資料館・松前藩屋敷 共通入館券		団体 (10名以上)	大人	290円
			小人	190円	
			個人	大人	620円
			小人	420円	
			団体 (10名以上)	大人	490円
			小人	330円	

※12月11日～4月9日までの期間は冬期閉館となります。

開館期間 4月10日～12月10日まで

午前9時～午後5時 ※入館受付は午後4時30分まで

利用案内



松前城資料館について
昭和24年6月5日、役場火災の飛火により、国宝であった福山城（松前城）の木造天守が焼失しました。その後、天守再建期成会により全道的な再建運動が展開され、横浜国立大学工学部・大岡寛教授の設計のもと、昭和35年に鉄筋コンクリート製の復興天守が完成します。翌年、付帯施設が竣工し、復興天守は松前城資料館としてオープンしました。

スタンプ

松本家・アイヌ民族関係資料

2階



近江商人の平藤野の持船・長者丸の船頭を代々務めた、松本家に関する資料を展示しています。また、松前藩医・村岡 格が落部（現八雲町）の有力者・井関周次郎（イカシノビ）から譲り受けたアイヌ民族関係資料や、蠣崎波響が描いた「夷酋列像」（フランス・ブザンソン美術考古博物館所蔵品の複製）を展示しています。

松前城資料館 展示案内

3階

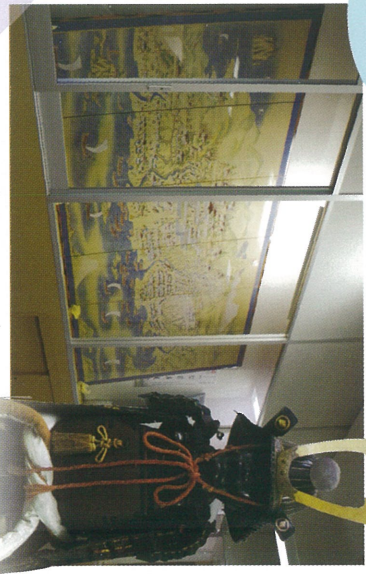
福山城古写真パネル・展望室



幕末から明治・大正・昭和に至るまでの福山城の古写真を展示しています。最上階の窓からは津軽海峡や津軽半島を望むことができます。

1階

松前藩・松前神楽関係資料



徳川將軍家からの領地御墨付や、蝦夷地地図、江戸松前藩邸図などの松前家からの寄託資料や、藩士の家々に伝わってきた資料のほか、蠣崎波響などの松前ゆかりの絵師・文化人たちの書画を展示しています。また、平成30年3月8日に国の重要無形民俗文化財に指定された「松前神楽」に関する資料も展示しています。

地下

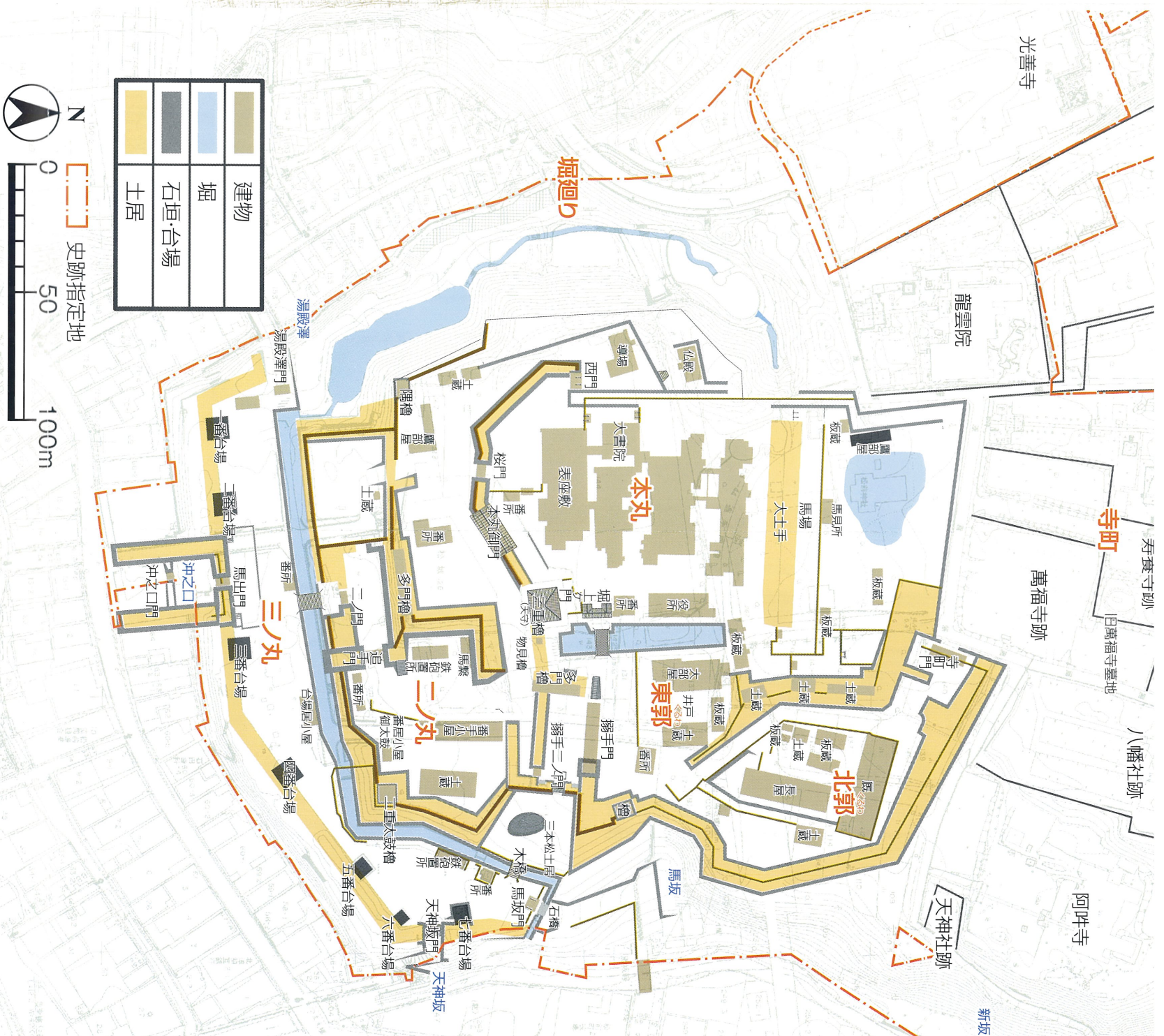
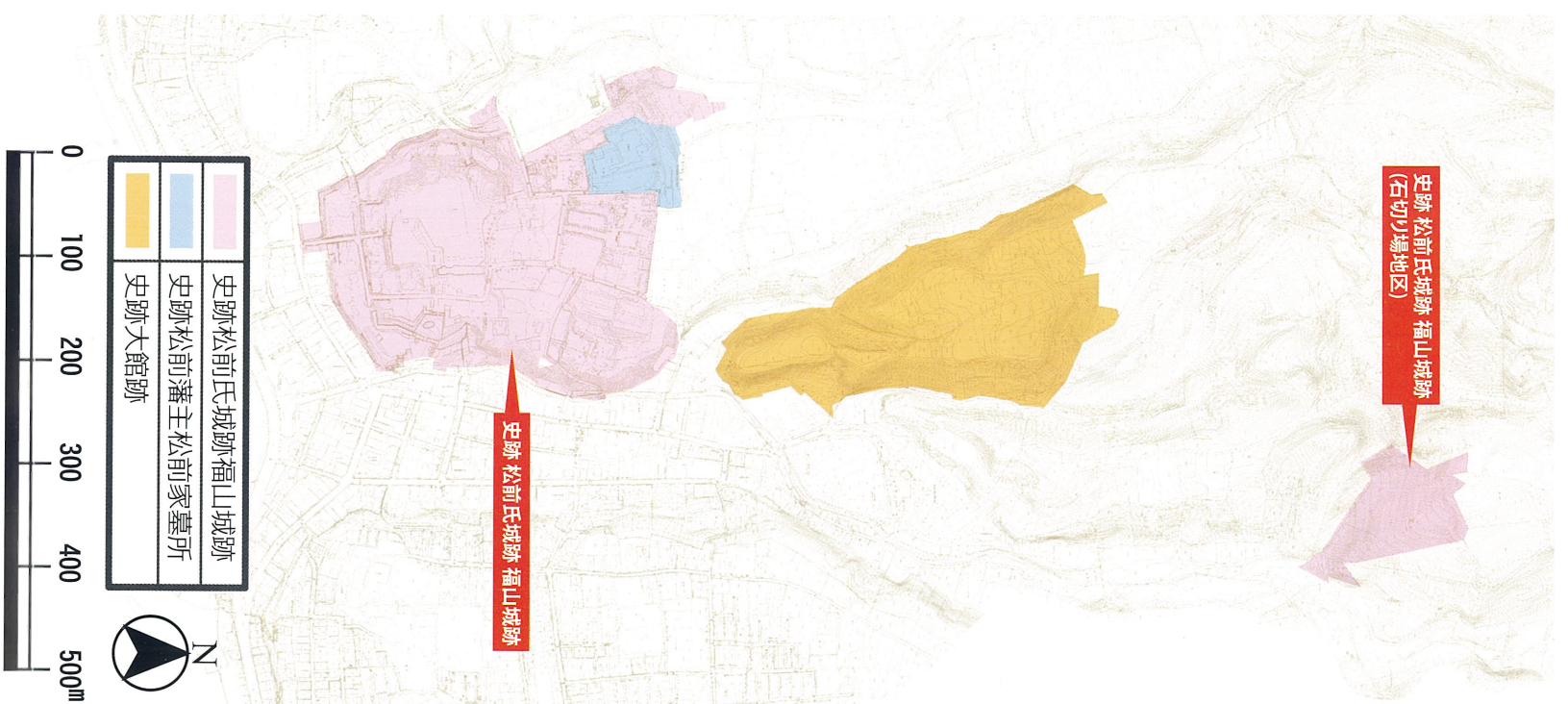
福山城縄張図・松前奉行所図



北海道唯一の近世大名であった松前氏の居城「福山城（松前城）」の縄張図（複製）や、築城に関する史資料を展示しています。

松前城資料館（福山城復興天守）建築概要

躯体／総鉄筋コンクリート造 三層屋根・入母屋造・銅板葺
大棟 鯨／青銅製メラミン焼付金箔押
外壁／総漆喰仕上
面積／地階：122.31㎡ 1階：161.98㎡
2階：119.00㎡ 3階：52.06㎡
高さ／天守台石垣上部より16.84m
総工費／5,025万円（昭和36年施工）



① 町内出土の砲弾・銃弾と石垣の窪み
明治元年・2年の箱館戦争は、松前城下に大きな被害をもたらしました。その痕跡として、現在でも、町内各所で当時の銃弾や砲弾などが出土することがあります。中には市街地から約500m離れた山中や、海岸沿いの斜面でも弾丸や砲弾が発見された例もあります。ちなみに、福山城・天守の南側石垣には、箱館戦争の際に砲弾が命中したとみられる痕跡(丸い窪み)があります。



② 旧国鉄松前線のトンネル跡
国鉄松前線は、松前町内で産出するベンカン(重晶石)として利用するための輸送経路として、第二次世界大戦下の昭和16年に敷設工事が開始されました。軍事優先の国策のもと福山城跡も沿線に取り込まれ、城跡を東西に横切るように開削、トンネルが敷設されました。そして、終戦後の昭和28年に工事が完了し、国鉄松前線が開通しますが、昭和63年に廃線になりました。城跡の堀廻り地区にある石積みは、旧国鉄松前線のトンネルの遺構として往時を偲ばせます。

福山館の築城当初の構造を知ることができる資料は確認されていませんが、シヤクシヤインの戦いの翌年・寛文10年(1670)に記された『狄峰起集書』によれば、本丸、二ノ丸、北ノ丸を有し、南は海岸部に突出した段丘崖、東は大松前川、西は湯殿沢という自然地形を利用し、要所に土塁・外堀・内堀・板塀が設けられていたとされます。安政元年(1854)に完成した新城福山城は、福山館を改修・補強したもので、南に隣接する重臣の屋敷地を三ノ丸として、北東に隣接する寺町の一部を北郭(北ノ丸)として取り込み、本丸、二ノ丸、東郭を有し、西は福山館期とほぼ同じ自然地形を利用したものとされています。最大の特徴は、海に面した三ノ丸に、外国船打ち払いのための7基の台場を備えていることです。福山城の築城にあたっては、城から北へ約1km離れた地点(石切り場地区)で産出する緑色凝灰岩が使用されました。切り出しは夏に行われ、冬に雪車(ソリカ)を使って運ばれたと記録されています。なお、『福山秘府』や『松前年々記』といった松前藩側の記録や、紀行文・絵図等には「福山城」・「松前城」という呼称がみられますが、松前藩が「幕府へ提出した『系譜之内御尋二付御答書』」によれば、「伊豆守慶廣 新二築候旧陣屋之地名に御座候」とあることから、築城当初の福山館の正式な位置づけは、城ではなく陣屋(または館)であったと考えられます。

外国船打ち払いのために築かれた新城福山城は、皮肉にも、明治元年(1868)の箱館戦争(戊辰戦争の局地戦)という内乱で、徳川脱走軍の手により陥落し、翌年、官軍により奪回されました。明治6年(1873)1月の廃城令を受けて開拓使へ移管された福山城は、明治8年(1875)までに三重御櫓・本丸御門及び東塀・本丸表御殿を除く城内の建物が一掃され、堀が埋められ、石垣が取り壊され、遂に廃城となりました。この図面は、実際の地形に極めて近い「松前城線図」(仮称)をもとに作成した縄張図と、現在の地形図を重ね合わせたものです。